

# エディトリアル

地域医療研究所長 山田隆司

昨年より開始された新専門医制度の中で19番目の新しい基本領域である総合診療の研修プログラムが始まった。新専門医制度が開始されるにあたって、国、地方自治体、他各種団体より医師の地域偏在を助長することのないよう強く求められた経緯から、総合診療のプログラムに関しては「へき地・過疎地・離島・医療資源の乏しい地域での研修が望ましい」ということが特に強調された。もともと総合診療医の使命が、国民の医療ニーズに沿った「地域をみる医師」という視点があったものの、「へき地」を研修に加えることに関しては総合診療専門医に関する委員会の中でも賛否両論があったのは事実である。初年度総合診療の領域の希望者がおよそ180名と少なかったのはこの影響とみる者も少なくない。

確かに研修という視点からは、一律に医師不足地域での研修を専攻医に義務付けるのは納得しがたい。指導体制など研修の環境整備が伴ってこそその地域研修とならなければ研修プログラムとして意味がない。今回その点で見切り発車的であったことは否めない。

そこで今回の特集である。まさに総合診療研修でのコアな部分である地域研修を中心的課題に据え、いずれも質の高いへき地での地域研修を実現しているプログラムである。葛西論文、原田論文ではへき地勤務義務を抱える自治医科大学卒業生を中心に検討されたプログラムが紹介されており、いずれもWeb会議システムを活用した質の高い指導体制が確立していることがうかがえる。井上(陽)論文では協会の「地域医療のススメ」の修了生が既に多くの地域を支え、また次の世代を育成していることが紹介されている。井上(大)論文では東京都の山間へき地、本村論文では沖縄の離島というそれぞれ典型的なへき地での歴史や文化に触れることで医師として成長することが述べられている。細江論文では地域病院を基幹とし、特に女性診療にも対応できる総合診療医の育成の取り組み、吉村論文ではやはり地域の中小病院を基幹にしたプログラムであるが、広く学生実習とも連携した取り組みが報告されている。

今回紹介されたプログラムはいずれも画期的で、へき地でこそ可能な総合診療プログラムのまさにお手本と言えるだろう。今後地域での総合診療医の育成の価値が広く認知され、より多くの若い医師がへき地で研修し、国民の真の医療ニーズに応えられる人材として育ってほしい。「へき地は医師をステキにする」のだ。